

週刊読書人 12月23日号
二〇〇五年の回顧「マスコミ」関係書

今年はいくつかまとまった全集がでた。筑紫哲也、佐野真一、野中章弘、徳山喜雄という売れっ子を編集人に岩波書店が刊行した『ジャーナリズムの条件』全四巻（1職業としてのジャーナリスト、2報道不信の構造、3メディアの権力性、4ジャーナリズムの可能性）は第一線のジャーナリスト八〇余人を執筆者に揃えた。個人では田原総一朗が「カラクリ」自選集全五巻（1政治と権力のカラクリ、2経済神話のカラクリ、3日米IT戦略のカラクリ、4メディアと権力のカラクリ、5性と生命のカラクリ、アスコム）を刊行した。高まる一方のジャーナリズム不信という風にこれまで以上に危機感が

ある。これに対し、ミネルヴァ書房 叢書現代のメディアとジャーナリズム全8巻の橋元良明・吉井博明（編）『ネットワーク社会』、山本武利（編）『新聞・雑誌・出版』は研究者からマクロな視点でメディア現象をとらえている。

戦後六〇年という立場からでなくとも、ジャーナリズムと戦争をテーマにした研究書はそう多くないが、水野剛也『日系アメリカ人 強制収容とジャーナリズム』（春風社）、竹山昭子『資料が語る太平洋戦争下の放送』（世界思想社）あるいは精力的に戦争と世論の関係を追求している佐藤卓己の『八月十五日の神話』（ちくま新書）などが刊行され、新たな問題提起を行った。

また木下和博『メディアは戦争にどうかかわってきたか』（朝日新聞社）は日露戦争からのメディアと戦争の概説

史として、そして湾岸戦争における米ジャーナリズムの「敗北」をめぐるの石澤靖治『戦争とマス・メディア』（ミネルヴァ書房、叢書現代社会のフロンティア4）などは、金山勉『ブッシュはなぜ勝利したか』（花伝社）と読み比べると面白いだろう。

他方、劇場型社会の到来と大衆社会の変容する容貌を、政治面から分かりやすく説いたのが谷藤悦史『現代メディアと政治』（一藝社）。松田浩『NHK 問われる公共放送』（岩波新書）や保阪正康＋クラレ編集部『メディアの迷走 NHK・朝日論争事件』（中公新書クラレ）などは二〇〇四年末からのNHKにかかわる問題の整理に役立つ。

日本のマス・メディア全体を概観した藤竹暁（編著）『図説 日本のマス・メディア』第二版』（NHKブックス）や

金山勉・金山智子『やさしいマスコミ入門』（勁草書房）は入門書として一般読者にも読みやすいし、メディア総合研究所（編）『放送中止事件50年』（花伝社）もブックレット形式だが必読書だ。

そしてテレビ放送五〇年を迎えた日本の生活・文化・意識、日本人はテレビをどう見てきたか。視聴行為の変容を探る田中義久・小川文弥『テレビと日本人』（法政大学出版局）を読むことを薦める。

総括としてはJ・カペラ、K・H・ジェイミソン『政治報道とシニシズム』（ミネルヴァ書房）だろう。

さてホリエモン、楽天と相次いでIT産業のメディア買収が起きた今年の国内メディア関係では、フジサンケイグループの盛衰を描いた中川一徳『メディアの支配者』上下（講談社、新潮ドキュメント

賞受賞)が秀作であり、B・フルフォード『改訂版 日本マスコミ「臆病」の構造』(宝島社)や金子勝『メディア危機』(NHKブックス)が日本のマス・メディア問題を厳しく論じている。

海外メディア関係では読み物として、世界の巨大メディアアグループを紹介したM・タングート(氷上春奈訳)『世界を制覇した二〇のメディア』(ブーマー)や横田増生『潜入ルポ アマゾン・ドット・コムの光と影』(情報センター出版局)、山本浩『仁義なき英国タブロイド伝説』(新潮新書)、オルファ・ラムルム(藤野邦夫訳)『アルジャジーラとはどういうテレビ局か』(平凡社)、玄武岩『韓国のデジタルデモクラシー』(集英社新書)がある。

最後に情報源秘匿裁判が続く中、高級紙の裏側を描い

ているH・フリール、R・フオーク、立木勝訳『ニューヨークタイムズの神話』(三交社)や日中韓三国でメディア共同事業化が進む東アジアに焦点をあてた菅谷実(編)『東アジアのメディア・コンテンツ流通』(慶応義塾大学出版会)と、ジャーナリズム分析の新たな手法を試みた大石裕『ジャーナリズムとメディア言説』(勁草書房)をあげる。

鈴木雄雅(すずき・ゆうが)上智大学文学部教授・新聞学専攻)

《追加》

P・フリッシー、江下雅之、山本淑子訳『メディアの近代史』(水声社)

小野義邦(編)『放送を学ぶ人のために』(世界思想社)

日本ビジュアル・ジャーナリスト協会(編)『フォトジャーナリスト13人の眼』(集英社新書)

金山智子『NPOのメディア戦略』(学文社)